〈論　文〉

鎌倉における伝統的な「古都観光」の継承に関する研究

押田　佳子

はじめに

わが国を代表する観光都市・「古都」鎌倉の起源を辿ると、江戸時代（以降、近世）まで溯る。鎌倉観光が注目される直接の要因の一つに、一六八五（貞享二）年に徳川光圀が編纂した歴史書『新編鎌倉志』の普及により、鎌倉の「古都」の魅力が認知されたことがある(1)。文人墨客はもとより、江戸庶民たちがこぞって訪れるきっかけを作ったことが、後世の旅行者たちが記した紀行文より窺える。さらに一八〇九（文化六）年に扇雀亭陶枝が記した『鎌倉日記』において、「家とじ我は朝に古都の講談す」とあり(2)、鎌倉の「古都観光」が少なくとも近世の旅行者には認識されていたとみられる。

そこで本研究は、鎌倉における「古都観光」を歴史的視点より捉え、景観工学による分析を通してその成立要因を抽出し、その継承状況より歴史地域における観光計画の立案につなげることを目的としている。

1．近世観光の発掘

本章では、歴史書『新編鎌倉志』編纂に先立つ調査紀行文として一六七四（延宝二）年に徳川光圀らによってまとめられた『鎌倉日記』に着目し、後の観光資源となった「歴史資源」「景観資源」について述べる(3)。

（1）歴史資源

『鎌倉日記』に掲載された歴史資源を表1に示す。

表1より、光圀によって発掘された歴史資源は全173件であり、これらを5月2日～7日の6日間で巡っていた。これらの歴史資源は、社寺が63件と最も多く、次いで旧跡が38件であった。旧跡の多くは、「86田代屋敷」の「田代ノ観音ノ北ノ前ナル畠也。」と記述されるように、荒地の状態で発見されており、中世以降廃れたまま放置されている状態が垣間見えた。

この調査に当たり、光圀一行は事前に文献資料に基づき綿密な調査を行っている。表1の引用に着目すると、全ての歴史資源に関する伝承・古事の記載は

表1　徳川光圀『鎌倉日記』における歴史的観光資源[3]

No.	歴史資源名	分類	引用		調査現地	No.	歴史資源名	分類	引用		調査現地	No.	歴史資源名	分類	引用		調査現地
			伝承・古事等	文献名					伝承・古事等	文献名					伝承・古事等	文献名	
1	瀬戸明神	社寺	○		聞き取り	58	サン堂	旧跡				117	盛久首座	旧跡			
2	称名寺	社寺	○	徒然草、他4		59	獅子谷	山	○			118	甘縄明神	社寺		東鑑	
3	能見堂	社寺	○			60	瑞泉寺	社寺	○			119	水無瀬ノ川	橋	○	万葉集、他2文	
4	光触寺	社寺	○	縁起		61	鞘阿弥陀	社寺	○		情報訂正	120	大梅寺	社寺	○		
5	塩嘗地蔵	地蔵	○			62	杉本観音	社寺	○	東鑑		121	大仏	社寺	○	東鑑、他2	
6	五大堂	社寺	○	東鑑		63	犬翔谷	谷				122	御興嶽	山	○		
7	視原屋敷	旧跡				64	衣張山	山				123	長谷観音	社寺	○		
8	馬冷場	池	○			65	報国寺	社寺	○	東海道名所記		124	御霊宮	社寺			
9	持氏屋敷	旧跡	○		情報訂正	66	滑川	川	○	太平記		125	星月夜井	井戸	○		
10	佐々木屋敷	旧跡	○			67	浄妙寺	社寺	○	旧蹟旧記		126	虚空蔵堂	社寺	○		
11	英勝寺	社寺	○	縁起		68	鉦足大明神	社寺		万葉集、他4		127	極楽寺	社寺	○	旧記	
12	源氏山	山				69	十二郷谷	谷				128	月影谷	谷	○	十六夜日記	
13	泉谷	谷				70	胡桃谷	谷				129	霊山崎	海岸	○		
14	扇井	井戸		東鑑、太平記		71	中谷	切通				130	針蟹橋	橋			
15	大友屋敷	旧跡				72	大御堂谷	旧跡	○	東鑑		131	音無滝	滝			
16	藤谷	谷	○			73	歌橋	橋				132	稲村崎	海岸	○		
17	飯盛山	山				74	文覚屋敷	旧跡				133	袖浦	海岸	○		
18	阿仏屋敷	旧跡	○			75	屏風山	山				134	十一人塚	旧跡	○		
19	智岩寺谷	旧跡	○			76	畠山屋敷	旧跡	○	東鑑		135	七里ヶ浜	海岸			
20	尼屋敷	旧跡	○			77	宝戒寺	社寺	○	旧記		136	金洗沢	川	○		
21	ﾎｳｾﾝ寺旧蹟	旧跡				78	葛西谷	谷	○			137	腰越村	地名	○	巌本院ノ縁起	
22	青竜寺谷	旧跡				79	塔辻	坂・道	○			138	万福寺	社寺	○		
23	景清籠	岩窟	○			80	大町小町	地名				139	袂浦	海岸	○	夫木集	
24	山王堂跡	旧跡				81	妙隆寺	社寺				140	竜口寺	社寺	○		
25	播磨屋敷	旧跡	○			82	妙勝寺	社寺				141	竜口明神	社寺	○		
26	六国見	山				83	大行寺	社寺				142	片瀬川	川	○	東鑑	
27	六本松	樹木	○	曽我物語		84	本覚寺	社寺	○			143	笈焼松	樹木	○		
28	化粧坂	坂・道	○			85	妙本寺	社寺	○			144	唐原	地名	○	夫木集	
29	葛原岡	旧跡	○			86	田代屋敷	旧跡				145	江嶋	地名	○	海道記、他1	
30	梅谷	坂・道	○	夫木集		88	辻薬師	社寺	○			146	杜戸	地名	○		情報不足
31	武田屋敷	旧跡				89	乱橋	橋				147	小壺村	地名			
32	海蔵寺	社寺	○			90	材木座村	地名		徒然草		148	鷲浦	地名			
33	浄光明寺	社寺	○	塩嚢抄		91	丁字谷	谷				149	飯島	地名	○		
34	網引地蔵	地蔵	○			92	紅谷	谷				150	亀井坂	坂・道			
35	藤為相石塔	石塔	○			93	桐谷	谷		東海道名所記		151	長寿寺	社寺			
36	寿福寺	社寺	○	東鑑	聞き取り	94	補陀落寺	社寺				152	官領屋敷	旧跡			
37	鶴岡八幡宮	社寺	○	東鑑、他1		95	逆川橋	橋				153	明月院	社寺	○		
38	鉄井	井戸	○			96	光明寺	社寺				154	禅興寺	社寺	○		
39	鉄ノ観音	社寺				97	道寸城	旧跡		北条五代記		155	浄知寺	社寺	○		
40	ﾎｰﾆｶﾊﾉ石塔	石塔	○	太平記		98	荒井閻魔	社寺	○			156	松岡山	社寺	○		
41	日金山	社寺	○			99	景政石塔	旧跡	○			157	円覚寺	社寺	○		
42	岩不動	社寺	○			100	下若宮	社寺				158	建長寺	社寺			
-	鶴岡八幡宮馬	社寺				101	裸地蔵	地蔵	○			159	地蔵坂	坂・道			
43	鳥合七原	旧跡	○			102	畠山石塔	旧跡				160	小袋坂	坂・道	○		
44	頼朝屋敷	旧跡	○	東鑑		103	荒荒神	社寺				161	聖天坂	坂・道			
45	キドブン	旧跡	○			104	人丸墓	旧跡	○			162	佐竹屋敷	旧跡			
46	報恩寺	旧跡				105	興禅寺	社寺	○			163	安養院	社寺	○	旧記	情報不足
47	永福寺	旧跡	○			106	無景寺谷	谷				164	花谷	切通	○	沙石集	
48	西御門	地名				107	法性寺屋敷	旧跡				165	妙法寺	社寺	○		
49	高松寺	社寺				108	千葉屋敷	旧跡	○	東鑑		166	安国寺	社寺	○		
50	来迎寺	社寺				109	諏訪屋敷	旧跡				167	名越入	切通		東鑑	
51	法華堂	社寺	○			110	左介谷	谷	○	東鑑		168	長勝寺	社寺	○		
52	東御門	地名				111	裁許橋	橋	○			169	日蓮乞水	井戸	○		聞き取り
53	荏柄天神	社寺			情報不足	112	天狗堂	社寺	○			170	名越坂	坂・道			
54	天台山	山	○			113	七観音谷	社寺				171	名越三昧場	旧跡	○	前記	
55	大楽寺	社寺				114	飢渇畠	旧跡	○			172	御猿場山王	旧跡	○		
56	覚園寺	社寺	○	旧記	聞き取り	115	笹目谷	谷	○			173	法性寺	社寺			
57	大塔宮土籠	石窟	○			116	塔辻	旧跡									

104件みられ、全体の約6割を占めていた。中でも『東鑑』は「6五大堂」など14件の説明で引用されており、鎌倉が武士の古都であった時代を読み解く上で大変重宝されていたことが窺える。また、「9持氏屋敷」と「61鞘阿弥陀」では文献の情報に誤りがあったため記述を訂正しており、「1瀬戸明神」など4件においては、住職や地元住民への聞き取りを行い、さらなる情報を収集していた。このように綿密な調査が実施された一方で、「53荏柄天神」の「然ドモ祝融ノ災度々ニシテ記録伝ハラズ。文献徴トスベキナシト云。」にあるように、情報不足であるものも3件みられた。鎌倉五山についてはその由来故、寺宝を隈なく調査しているが、「158建長寺」について「昔ノ跡トテ今モ猶実ニ五山トオボシキハ円覚・建長ノ二寺ノミ。」と記されていることより、由緒ある社寺といえども良好な状態で維持されていなかった様子が捉えられる。

以上のように、『鎌倉日記』に掲載された歴史資源の多くを社寺や旧跡が占める一方、建長寺や荏柄天神の記述にみられるように、由緒ある社寺においてすら幕府崩壊後は廃れるがままの状態であった。このことより、中世から近世に至る約三百年の時間経過ならびに資料不足は、光圀の調査を難航させたと考えられる。一方で、文献と現地踏査によるきめ細かな調査により、位置関係やいわれが概ね解明されただけでなく、その多くが現代においても観光資源として継承されていることより、光圀一行の調査は、現代観光における発掘作業として位置づけられるといえよう。

(2) 景観資源

光圀一行は、短期間に173件もの歴史資源を抽出するにあたり、効率的な移動を余儀なくされたとみられる。そのため、巡検の過程において各歴史資源を視点場とした眺望、あるいは視対象として歴史資源を捉えるといった、景観工学的な視点による空間把握において重要視されていたであろうと考えられる。この考えのもと、『鎌倉日記』における「景観資源」に着目し、以下で考察を述べる。

表2より景観資源に関する記載状況は11地点で15件みら

表２　徳川光圀『鎌倉日記』における景観的観光資源

	No.	地点名	景観
眺望	3	能見堂	此地ヨリ上下総、房州、天神山、鋸山等海上ノ遠近ノ境地、（略）絶景也ト云。
	26	六国見	従是安房・上総・下総・武蔵・相模・伊豆ノ六ヶ国能ク見ユル。
	71	中谷	釈迦堂谷トモ云フ。雪下ヘ帰ル海道ヨリ名越口ヲ眺望ス。
	145	江嶋	（魚板岩にて）其上ニ座して四方を眺望するに（略）、豆駿。上下総・房州等ノ諸峯連分明ニ眼前ニアリ。富士ハ児淵ノ真西ニアタル。
俯瞰	27	六本松	駿河次郎清重ガ此所ニノボリ、鎌倉中ヲ見タル旧跡也トゾ
	72	大御堂谷	鎌倉中ノ勝地ヲ見、御所ノ南ノ山ノ麓ニ勝タル地形アリ。
海岸景観	97	道寸城	此所ヨリ飯嶋ナドヲ望ミテ由比浜ヲ帰ル。
	145	江嶋	（トッテガ崎より）豆州ノ大嶋等見ユル。城ガ嶋ノ北ニ見タルハ見崎、其北ヲ荒崎ト云。
			（巌本院より）士峯ノ雪筵ヲ照シ、海波淼漫トシテ無限風光ナリ。
			（巌本院より）多景ニヒカレ、シバシバ盃ヲ傾ク。
	146	杜戸	（南の海上の名嶋を望み）折シモタ陽波ニ浮ンデ日ヲ洗フガ如シ。
	148	鷲浦	片浜ニテ景地ナリ。
庭園	153	明月院	庭除ノ風景殊ニ勝レタリ。
	158	建長寺	昔ノ跡トテ今モ猶実ニ五山トオボシキハ円覚・建長ノ二寺ノミ。境内広ク、山澗林岡樹木鬱々タル勝地ナリ。
			庭除多景也。

れ、これらは、山なみを見渡す「眺望景観」が4件、山頂より鎌倉の街なみを見下ろす「俯瞰景観」が2件、海面とそれに付随する景観を愛でる「海岸景観」が6件、寺社の庭園を讃える「庭園景観」が3件、抽出された。

景観資源の多くは「37鶴岡八幡宮」付近の高台に集中しており、このあたりの立地が眺望景観または俯瞰景観に適していたことが捉えられる。視点場と視対象との関係から傾向をみると、眺望景観は、「3能見堂」の「此地ヨリ上下総、房州、天神山、鋸山等海上ノ遠近ノ境地」のように高所から遠方の山並みを捉えたものと、「145江嶋」の「其上ニ座して四方を眺望するに」のように、低地から水平で遠方を捉えたものとがみられた。特に、「3能見堂」は「絶景也ト云。」とあるように、絶好の視点場であったことが捉えられる。

俯瞰景観は、視点場が高台にあったと考えられるが、「72大御堂谷」の「鎌倉中ノ勝地ヲ見、御所ノ南ノ山ノ麓ニ勝タル地形アリ。」にあるように、鎌倉の中心地を眺める程度の高さであったと考えられる。

海岸景観のうち3件は「145江嶋」に関連しており、高貴の者が宿とした岩本院を視点場とした「士峯ノ雪筵ヲ照シ、海波淼漫トシテ無限風光ナリ。」にみられるような、海面とその後背との関係を愛でている様子が捉えられた。

以上のように、景観資源では眺望景観、俯瞰景観、海岸景観において歴史資源自体が視点場として発掘された様子が捉えられた。このうち「3能見堂」のように伝統的な視点場を除く多くは、光圀一行が歴史資源を発掘する過程において偶然発掘したものであるといえ、彼らがこの成果を『鎌倉日記』、さらに『新編鎌倉志』に記したことによって、歴史資源と相俟って後世に継承されたと考えられる。

（3）近世観光の発掘のまとめ

徳川光圀が編纂した紀行文『鎌倉日記』からの読み取り調査より、近世観光の発掘を捉えた結果、古都鎌倉の「売り」ともいえる173件の歴史資源が抽出できた。さらに光圀一行は歴史資源の調査過程において景観資源を発掘し、金沢八景などを眺望する能見堂にみられるように、歴史資源を良好な視点場として捉えていたことが示された。

以上より、近世観光の発掘は、歴史資源の調査過程において後の観光資源となる景観資源が発見された時期であるといえる。

2．近世観光発達期

本章では、光圀以降、後述する近世観光成熟期の十返舎一九に至る期間を近世観光発達期とし、この頃に記された11文献の紀行文を対象に、「歴史的観光資源」「景観的観光資源」「滞在拠点」「観光経路」の4視点より、当時の鎌倉の観光形態を捉える(4)。

（1）歴史的観光資源

表3に各文献に掲載された歴史的観光資源の件数と鎌倉における滞在日数を示す。

表3より、各文献の著者は短期間鎌倉に滞在しており、6～226件の歴史的観光資源を巡っていたことを捉えた。注目すべきは『相中紀行』における226件は光圀の『鎌倉日記』の173件をはるかにしのぐ件数である。この理由として、光圀以降に価値を見出された資源や、旅行者や鎌倉で観光業に従事している者から新たな資源として加えられた資源などの存在が挙げられる。

各文献における主な歴史的観光資源に着目すると、11文

表３　近世観光発達期における歴史的観光資源

文献名	著者名	刊行年	滞在日数	歴史的観光資源（件）
鎌倉紀	自住軒一器子	1680	2泊3日	125
東海済勝記	三浦迂斎	1762	不明	10
東路の日記	（不明）	1767	3泊4日	36
草まくらの日記	本居大平	1773	不明	6
相中紀行	田良道子明甫	1797	3泊4日	226
三浦紀行	一鶴堂白英	1801	5泊6日（うち2泊は三浦）	66
江の島	大島完来	1805	1泊2日	28
鎌倉日記	扇雀亭陶枝	1809	4泊5日	41
遊歴雑記	十方庵大浄	1809-21	不明	68
江の嶋の記	菊池民子	1821	1泊2日	25
鎌倉日記	祖祐	1830頃	2泊3日	40

献全てにおいて「鶴岡八幡宮」が記載されており、当時の鎌倉観光において中心的な観光資源であったことが窺える。

次いで、「長谷寺」が9件、「江の島」が8件、「由比ヶ浜」が7件となっており、鎌倉海岸沿いの歴史的観光資源が多く記載される傾向がみられた。また、これらの文献に記載される歴史的観光資源は、基本的に光圀によって発掘された「歴史資源」を継承していることが確認された。

以上より、近世観光発達期の歴史的観光資源は、基本的には光圀らが発掘した歴史資源を継承しながらも、新たに歴史的観光資源として認識されるようになったものが追加されるようになったことが捉えられた。

（2）景観的観光資源

景観を観光対象とした「景観的観光資源」に関する記述は11文献中10文献においてみられた。表4に10文献でみられた景観的観光資源を示す。

表4より、景観的観光資源は各文献で1～35件、のべ126件抽出され、このうち約83％を占める104件が歴史的観光資源であった。例えば、『東路の日記』の能見堂において、「かなざわといへるところの海も山も島も橋も野も只ひと目に見え侍りとて名だゝる所也。」と記されており、能見堂が光圀の時代同様、金沢八景を眺望する良好な視点場であったことが窺える。

歴史的観光資源における景観に関する記述をみると、視点場としては、能見堂、鎌倉山、稲村ケ崎、鶴岡八幡宮、江の島などが抽出され、海岸を水平に眺望する記述がみられた江の島以外は、俯瞰のパノラマ景を愛でていた様子が捉えられた。

視対象としては、金沢八景、大仏、七里ヶ浜、江の島が富士山と合わせて、絵画的なシーン景観として好まれる傾向が捉えられた。以上より、近世観光発達期における景観的観光資源の多くは歴史的観光資源が占めており、これらが主に視点場として描写される傾向を捉えた。

（3）滞在拠点

本節では、滞在拠点として宿泊などに用いられた「宿屋」に加え、「茶屋」における記述に着目する。

以降では、紀行文別に捉えた宿屋および茶屋の所在、屋号、記載されている利用目的をもと

表４　近世観光発達期における景観的観光資源（網かけは歴史的観光資源）

文献 刊行	鎌倉紀 1680年		東海済勝記 1762年	東路の日記 1767年		相中紀行 1797	三浦紀行 1801	江の島 1805
景観の記述がみられた地点	金沢 能見堂 亀山院 弁財天の嶋 五大堂 雪の下に至る道 北条屋敷 八幡宮 十二坊 法花堂 杉本の観音 建長寺 円覚寺 六国見の峯 扇の井 網引地蔵 冷泉為相興石塔 松葉が谷 名越坂 光明寺	盛久が松 三介が谷 三介が屋敷 大仏へ出る道 大仏 長谷の観音 稲村が崎 七里が浜 腰越 竜口寺 不明 江の嶋 不明（参道） 児が淵 まないた石	江の島 - 鎌倉方面	能見堂に至る道 能見堂 山路 称名寺 瀬戸の橋 弁天の御社 朝夷那のきりどほし なめり川 えがらの天神の御社 歌の橋 だんかづら つるがをか八幡の御社 建長寺 浄智寺 景清をいれおきしひとや 不明 いなむらがさき 七里が浜 かた瀬の浜 児が淵	岩本院	七里ヶ浜 長谷村 十二院 名越 鷲が浦 稲荷の社 天台山	一覧亭 能見堂 野島 七里が浜 魚板石 唐が原	七里ヶ浜 稲むらが崎 長谷観音堂 明月院 朝夷名切通
件数	35件（歴史：31件）		1件（0件）	21件（17件）		7件（7件）	6件（6件）	5件（5件）

文献 刊行	鎌倉日記 1809	遊歴雑記 1809-21		江の嶋の記 1821	鎌倉日記 1830頃
景観の記述がみられた地点	岩本院 岩屋 袂カ浦 門前の茶店 長谷小路 六本にわかれたる大木杉 建長寺	ゑのしま（弁天島） 一遍上人の加持水 児が淵 魚板石 弁財天 西もろこしの原 磯辺 鎌倉長谷寺の大観音 鶴岡八幡宮 日朗が土の牢身がはり堂 田代観音 段かづら 片瀬村 竜燈の松の側の茶店 ゑびすや 腰越満福寺 霊山が崎 七里が浜 出茶屋 茶店	甘縄の神明 鶴岡八幡宮 円覚寺 杉本の観世音 鼻欠け地蔵	金沢のほとり 能見堂 瀬戸橋 八幡の大御神 囚獄の跡 七里ヶ浜 児が淵	能見堂 瀬戸の入江 東や 金竜禅院飛石寺 頼朝公の御屋敷の跡 鶴岡 建長寺 東渓寺 円覚寺 光明寺 不明 茶店
件数	7件（5件）	25件（18件）		7件（7件）	12件（8件）

に、これら滞在拠点の成立過程を把握する。

（i）宿屋

表5より、「宿屋」の記載は11文献中8文献において16件みられた。宿屋は「雪ノ下」で最多の8件がみられ、次いで「江の島」4件、「金沢」3件であった。これらの立地より、宿屋は著名な歴史的観光資源に依る分布を示していることがわかる。拠点ごとの特徴についてみると、「雪ノ下」は、『鎌倉日記』（扇雀亭陶枝）に「壇桂半に琵琶橋・中の鳥居、雪の下、泊宿軒をつらねたり。」とあるように、鶴岡八幡宮の門前の宿屋街

表5　近世観光発達期における滞在拠点（宿屋）

文献名	刊行年	著者	所在地名	屋号	旅行者の記載利用目的					記載状況の抜粋
					宿泊	食事	休憩	景観眺望	見物・通過	
鎌倉紀	1680	自住軒一器子	雪ノ下	（不明）	●					「又雪の下のやどりへ帰りて酒などたうべて休みぬ.」「日も暮かたに及ぬれば雪の下の宿に帰りぬ. 夜すがら酒などたうべてあそべり. 月おもしろし.」
東海済勝記	1762	三浦迂斎								
東路の日記	1767	（不明）	雪ノ下	（不明）	●					「（中略）こゝなん雪のしたてふ人やどりするところなり. そこにとまりぬ.」
			江の島	岩本院	●					「岩本院といへるすぎやうざの家にいりてしばしものし侍り.」「今宵はこゝにし侍ればとて我もまたゑひぬれば, たれも彼もこゝろのどけく面白がりていね侍りぬ.」
草まくらの日記	1773	本居大平								
相中紀行	1797	田良道子明甫	雪ノ下	（不明）	●					「これより東の方長谷小路を経て雪の下の旅亭に至て宿す. 宿する所の旅亭ハ雪の下の社人加茂左京なるものゝ家なり.」
三浦紀行	1801	一鶚堂白英								
江の島	1805	大島完来	雪ノ下	（不明）	●					「雪の下の舎りにしてはからずも秋山雅婦の詣逢ぬる事のたのしくも心澄めば夜寒さや絵のもの語句の咄」
鎌倉日記	1809	扇雀亭陶枝	江の島	岩本院	●					「此日は岩本院こんざつして, 別の宿りに入る.」「人々皆島を立れければ, 片山氏より案内有て, 已刻過頃院の一間にうつる.」
			長谷	三ツ橋屋		●				「長谷なる三ツ橋といへるにて, ひるのしたゝめする. 生々しき鯵を火とらす爰は泊宿有所なり.」
			雪ノ下	（不明）					●	「壇桂半に琵琶橋・中の鳥居, 雪の下, 泊宿軒をつらねたり.」
遊歴雑記	1809～1821	十方庵大浄	江の島	ゑびす屋		●				「（中略）, 岩屋より出し頃は雨頻なれば, 福団子もろくゝに味はて, 竜燈の松の茶店に海上を眺望し, 頓てゑびすやへ立戻り, 二階の見はらしへ通りて昼餉したためぬ.」
			雪ノ下	（不明）					●	「雪の下類焼して天行（はやり）賑ふは, 此節長谷の観音前と鶴が岡西門通り坂路の旅籠やなりけり.」
				明石屋	●					「（中略）, 八幡の西坂なる明石屋は身近き縁者なれば止宿せよといひ教えしまゝ, 建長寺等へ逍遙の折から見込て通りしが, 住居も広からで薄闇き構ゆへ, しらぬ顔に行過, 一泊せざり.」
江の嶋の記	1821	菊池民子	金沢	扇屋	●			●		「何くれと時をうつしてたそがれ近うなりければ, やどりもとめんとてすさき町瀬戸ばしなンどいへるおもしろき所々をながめつゝ, 金沢の里なる扇屋とかのもとに宿りぬ.」「さて宿りにかへりて海つらを見やるに風凪日うらゝかにて, 塵にまがへる沖の舟の真帆かた帆のさまゞなる, 浪にうかみておもしろく, 又は網引なす舟の数おほく, 浪をひらきてはしるなンど絵に書たるやうなり.」
鎌倉日記	1830頃	祖　祐	金沢	東屋			●			「坂を下りて瀬戸橋を渡り, 東や ニ着す.」
				千代本					●	「外ニ両三軒之内, 千代本当時流行の旅籠や, 前通りて金竜禅院飛石寺, 山内裏山八景一の地, （中略）」
			雪ノ下	（不明）	●					「下山して御門前雪の下ニ旅宿をもとめ一宿ス.」
			江の島	紀の国屋	●					「紀の国や半六方へ宿り求ム.」

として栄えていたことが読み取れる。「江の島」は、『鎌倉日記』（扇雀亭陶枝）において「此日は岩本院こんざつして、別の宿りに入る。」という記載にあるように、雪ノ下同様に宿屋が軒を連ねていた様子が捉えられた。表5より、旅行者の利用目的についてみると、宿泊が10件と大多数を占めるものの、『鎌倉日記』（扇雀亭陶枝）以降、時代の経過に伴って、食事や休憩のみといった一時的な滞在が加わる傾向がみられた。例えば『鎌倉日記』（扇雀亭陶枝）では、「爰は泊宿有所なり。」とあるように、立ち寄った箇所が有名な宿であることを知った上で、昼食や道中の休みをとりながら眺望を楽しんでいる様子が描かれている。

以上のことより、宿屋は歴史的観光資源、景観的観光資源による分布がみられ、時代を経るに従って、利用のされ方が多様化する傾向が捉えられた。

（ii） 茶屋

表6より、「茶屋」の記載は『江の島』（大島完来）以降の5文献において17件みられた。これらの所在は鶴岡八幡宮門前の雪ノ下に3件、稲村ケ崎から片瀬に至る鎌倉海岸沿いに3件、長谷寺や極楽寺周辺に4件、江の島に2件みられた。

「雪ノ下」「江の島」付近に茶屋が立地することより、茶屋と宿屋の所在は概ね似通っているといえるが、茶屋は稲村ケ崎―江の島間の鎌倉海岸沿いに特徴的に多い傾向が認められる。

また、表6より、屋号が確認できる茶屋は『鎌倉日記』（扇雀亭陶枝）に記された「ばゞが茶屋」と「猿茶屋」などの6件であった。

旅行者の利用目的についてみると、休憩が13件と最も多く、次いで景観眺望が5件、見物・通過が2件であった。

このことより、滞在拠点のうち茶屋は景観的観光資源に強く依っていたと考えられる。

『遊歴雑記』における「頓て又稲村が崎の茶屋にやすらひ、荒磯の見納めぞとて、いよいよ風景を賞し（以下略）」のくだりでは、稲村ケ崎が江の島から雪ノ下へ向かう際に海

表６　近世観光発達期における滞在拠点（茶屋）

文献名	刊行年	著者	所在地名	屋号	旅行者の記載利用目的			記載状況の抜粋
					休憩	景観眺望	見物・通過	
鎌倉紀	1680	自住軒一器子						
東海済勝記	1762	三浦迂斎						
東路の日記	1767	（不明）						
草まくらの日記	1773	本居大平						
相中紀行	1797	田良道子明甫						
三浦紀行	1801	一鶚堂白英						
江の島	1805	大島完来	稲村ケ崎	（不明）	●			「一ひらの紙に図してかまくらの山の古戦場を物がたるあやしき茶店に憩ひて絵ときする嫗に打れな秋の蠅」
鎌倉日記	1809	扇雀亭陶枝	岩屋前	岩本院	●	●		「岩屋まへ出茶屋の床机に休，福団子とてあきなふ．（略）雨後の景色誠ことに絶景也．時ならぬ雪の岩ほにうつりきは浪の花をもちらす江のしま」
			江の島	（不明）			●	「十八日は空も晴ぬれば，朝間岩本院を立て，島を過ぬとするに，汐高くして島根迄浪打寄，よしずまとゐたる出茶屋の二軒程も，波にひたりぬれば，渡し人の肩を労すまでもあらじと，島根つたへ東浜漁場に行て干潟にをり，（中略），網うちする漁夫あり．」
			袂ヶ浦	（不明）				「此浜の片辺に床机ならべたる茶店に休て七里浜眺望す．」
			稲村ヶ崎	ばゞが茶屋	●			「いなむらの崎の茶屋に休．ばゞが茶屋といふ由．ここにて鎌倉の絵図ひさぐ．」
			極楽寺の門前	（不明）	●			「門前の茶店に駕籠をやすむ．夫より虚空蔵堂，宝物，明星石・貝の玉・九穴貝・唐銭・唐鏡有．此所高みにて見はらしよろし．」
			景政社の前	（不明）	●			「景政社のまへにても床机ならべ茶をにて，力餅・□□子といへる有．是に休み，これをもとむ．」
			赤橋そば	（不明）			●	「おのれは政之輔をつれて，雪の下八幡の御社近迄行廻りて，赤橋といへる橋のわきのかたに出茶屋有．」
			巨福呂坂	猿茶屋	●			「これよりもとの道にかへりて，総門を出れば，家つづきにて巨福呂坂なるに，猿茶屋と云に休て，酒筒をひらき，鯵ぬたてふ物作せぬ．庭の真なかに，大きやかなる猿をつなぎ置たり．此茶屋店は，江戸より遠乗の騎しや休足の所なり．」
遊歴雑記	1809～1821	十方庵大浄	藤沢～片瀬近辺	（不明）				「（略）爰を通行せし頃までは途すがら憩ふべき茶店もなかりしに，今年文政四辛巳どし通行し見ればところ〴〵に心聞たる茶店出来て，急雨は勿論よろづ不自由なきは感ずるに堪たり．」
			児が淵	（不明）	●	●		「（略）雨ふり出しければ妙栄尼をば児が淵の上なる竜燈の松の側の茶店に待せ置，是より両女を同道し」
			行合川	（不明）	●	●		「これ等の古跡あら〳〵指さし教て，頓て行あひ川の彼処の出茶屋にやすらぬ（略）茶店の床机に憩ひて四方を眺望するに」
			稲村ケ崎	（不明）	●	●		「（中略），頓て又稲村が崎の茶店にやすらひ，荒磯の見納ぞとて，いよ〳〵風景を賞し，いつまでも眺望し慰むを」
			権五郎景政社内	（不明）	●			「頓て権五郎景政が社へ参詣して，社内の出茶屋に憩ふ．」
江の嶋の記	1821	菊池民子	金沢	扇屋	●			
鎌倉日記	1830頃	祖　祐	朝比奈切通の峠	東屋	●			「朝比奈の切通しを打越んと，峠の茶店に一同労を休．　アヽウント峠の息や玉の汗」
			袖ヶ浦	紀の国屋	●	●		「茶店ニ暫時休息して左リニ稲村ヶ崎，右ハ七里ヶ浜，海上遥ニ伊豆の大嶋を遠見し，西の方ハ江の嶋，遠くハふじ山・箱根山を打詠め，景色言語ニ絶し思はず時をうつす．なみにうつる影や目につく皐月富士」

岸景観を見おさめる地点として認識されていたことがわかるが、その一方で雪ノ下から江の島へ向かう際には、後述する当時の主流経路において最初に海岸景観を望める地点であったとも考えられる。このため、稲村ケ崎は歩行シークエンス景観の転換点として重要な地点であったといえ、この価値を知っていた当時の人々によって景観を売りとした茶屋街が発達したと推測される。

また、景観的観光資源において七里ヶ浜・江の島・富士山を合わせた景観が好まれる傾向が抽出されたが、これは『鎌倉日記』（祖祐）の袖ヶ浦の茶屋における「（略）袖ヶ浦ニ至ル。茶店ニ暫時休息して左りニ稲村ヶ崎、右ハ七里ヶ浜、海上遥ニ伊豆の大嶋を遠見し、西の方ハ江の嶋、遠くハふじ山・箱根山を打詠め、景色言語ニ絶し思はず時をうつす。なみにうつる影や目につく皐月富士」の記述や、『遊歴雑記』の行合川近辺の茶屋における記述からも読み取ることができる。このことより、稲村ケ崎―江の島間の茶屋はただ単に経路上の休憩地点として立地しているだけでなく、景観的観光資源である七里ヶ浜・江の島・富士山を眺望できる良好な視点場であったと推測される。

また、表6より、『遊歴雑記』の「藤沢の茶屋」において「今年文政四辛巳どし（一八二一年）通行し見ればところどころに心聞たる茶店出来て（略）」とあり、藤沢から片瀬近辺までの範囲で、約二十年間に及ぶ茶屋街の形成過程を窺い知ることができる。

また、『鎌倉日記』（扇雀亭陶枝）では8軒もの茶屋が記載されており、「岩屋まへ出茶屋の床机に休、（中略）雨後の景色誠ことに絶景也。」など、茶屋からの眺望などが記されていた。

以上より、茶屋は七里ヶ浜・江の島・富士山を眺望できる稲村ケ崎―江の島間に集中していることを明らかにした。

さらに各茶屋を訪ねた旅行者たちの記述より、茶屋の分布は景観的観光資源に依ることを捉えた。

（4）観光経路

観光経路は、「鎌倉入」「鎌倉出」の地点および歴史的観

表７　近世観光発達期における観光経路

文献名	筆者	立ち寄った主な歴史的観光資源								経路タイプ
		鎌倉入	観光地点1	観光地点2	観光地点3	観光地点4	観光地点5	観光地点6	鎌倉出	
鎌倉紀	自住軒一器子	六浦	金沢	光明寺	鶴岡八幡宮	由比ヶ浜	長谷寺	江の島	固瀬河	A-1
東海済勝記	三浦迂斎	固瀬河	江の島	由比ヶ浜	鶴岡八幡宮	建長寺			小袋坂	D
東路の日記	不明	六浦	金沢	光明寺	鶴岡八幡宮	由比ヶ浜	長谷寺	江の島	固瀬河	A-1
草まくらの日記	本居大平	小袋坂	鶴岡八幡宮	長谷寺	稲村ケ崎	江の島（舟）			固瀬河	E
相中紀行	田良道子明甫	固瀬河	七里ヶ浜	稲村ケ崎	鶴岡八幡宮	由比ヶ浜	建長寺	由比ヶ浜	六浦	C-1
三浦紀行	一鶴堂白英	六浦	金沢	三浦半島	鶴岡八幡宮	長谷寺	江の島		固瀬河	B
江の島	大島完来	固瀬河	七里ヶ浜	稲村ケ崎	長谷寺	鶴岡八幡宮	由比ヶ浜	建長寺	六浦	C-2
鎌倉日記	扇雀亭陶枝	固瀬河	七里ヶ浜	長谷寺	鶴岡八幡宮	建長寺	建長寺		小壺	F
遊歴雑記	十方庵大浄	固瀬河	江の島	長谷寺	鶴岡八幡宮	稲村ケ崎	建長寺		固瀬河	—
江の嶋の記	菊池民子	六浦	金沢	鶴岡八幡宮	長谷寺	江の島			固瀬河	A-2
鎌倉日記	祖祐	六浦	金沢	鶴岡八幡宮	光明寺	由比ヶ浜	長谷寺	江の島	固瀬河	A-1

光資源、景観的観光資源、滞在拠点の記載状況より捉えた。

表７に各文献における「鎌倉入」「鎌倉出」の地点とその間に通過した主要な歴史的観光資源を示す。

表７より、全11文献における観光経路は、「六浦→固瀬河」（経路タイプＡおよびＢ）、「固瀬河→六浦」（同タイプＣ）、「固瀬河→小袋坂」（同タイプＤ）、「小袋坂→固瀬河」（同タイプＥ）、「固瀬河→小壺」（同タイプＦ）に分類される。

タイプＡは、六浦から朝比奈切通を経て現在の鎌倉市内を通った後、江の島、固瀬河に至る経路であり、４文献でみられた。これらは、鎌倉市内で巡った観光地点の数や順序よりさらにＡ―１、Ａ―２に分類できる。

Ａ―１は、「六浦→金沢→鶴岡八幡宮・光明寺→由比ヶ浜→長谷寺→江の島→固瀬河」の順に観光した『鎌倉紀』（自住軒一器子）などの３文献でみられた。Ａ―２は「六浦→金沢→鶴岡八幡宮→長谷寺→江の島→固瀬河」の経路を辿った『江の島の記』でみられた。タイプＡ全ての経路に共通する観光地点は、「鶴岡八幡宮」と「長谷寺」「江の島」「金沢」の４地点であった。

タイプＢは『三浦紀行』のみであり、六浦から金沢を観光した後、直接鎌倉市内には行かずに三浦半島を経由することで区別され、鎌倉市内では「鶴岡八幡宮」「長谷寺」を経て「江の島」に到達しており、Ａ―１と似通った観光

経路を辿っていた。

タイプCは「鎌倉入」が固瀬河、「鎌倉出」が六浦とタイプAの真逆となっていることより特徴づけられ、観光地点の数や順序からC―1、C―2に2分類できる。

C―1は「固瀬河→七里ヶ浜→稲村ケ崎→鶴岡八幡宮→由比ヶ浜→建長寺→六浦」（『相中紀行』）、C―2は「固瀬河→七里ヶ浜→稲村ケ崎→長谷寺→鶴岡八幡宮→由比ヶ浜→建長寺→六浦」（『江の島』）という経路を辿っていた。

タイプDは「鎌倉入」が固瀬河、「鎌倉出」が小袋坂と、鎌倉を出る際に大船経由で東海道に至る経路をとっており、「固瀬河→江の島→由比ヶ浜→鶴岡八幡宮→建長寺→小袋坂」（『東海済勝記』）の順に観光している。

タイプEは「鎌倉入」が小袋坂、「鎌倉出」が固瀬河と、タイプDの真逆となっていることより特徴づけられ、『草まくらの日記』のみでみられた。

タイプFは「鎌倉入」が固瀬河、「鎌倉出」が小壺であり、『鎌倉日記』（扇雀亭陶枝）のみでみられた。

なお、『遊歴雑記』は3度に分けて鎌倉を訪れたものをひとまとめにしたものであることより、特徴的な経路が抽出できなかった。

以上より、近世発達期における観光経路は六浦より鎌倉入りし、固瀬河より鎌倉を出るタイプAが主流経路であるといえ、タイプA全てに共通する歴史的観光資源は「鶴岡八幡宮」と「長谷寺」「江の島」「金沢」の4地点であった。

また、主流経路上には景観的観光資源、滞在拠点が多く抽出された「金沢」「稲村ケ崎」「七里ヶ浜」「江の島」があることより、主流経路は観光資源と相俟って発展したとみられる。

（5）近世観光発達期のまとめ

近世観光発達期では、光圀の頃の歴史資源が観光対象となった歴史的観光資源が、光圀以降新たに歴史的価値が見出された資源を加える傾向を捉えた。

景観的観光資源の多くは、歴史的観光資源が占めており、これらは主に視点場として描写される傾向を捉えた。

滞在拠点のうち宿屋については、歴史的観光資源、景観的観光資源による分布がみられ、時代を経るに従い利用のされ方が多様化する傾向を捉えた。茶屋については七里ヶ浜・江の島・富士山を眺望する稲村ケ崎―江の島間に集中しており、その分布が景観的観光資源によることを捉えた。

鎌倉に入った地点、出た地点と歴史的観光資源より捉えた観光経路では、金沢より鎌倉入し、固瀬河より鎌倉を出る経路が、歴史的観光資源に加え、景観的観光資源、滞在拠点を網羅する主流経路であることを捉えた。

以上より、近世観光発達期は、光圀一行によって発掘された歴史資源に新たな観光資源を加えた歴史的観光資源を抽出し、これをベースに景観的観光資源、滞在拠点、観光経路が発見された時期であるといえる。

3．近世観光成熟期

本章では十返舎一九著『金草鞋箱根山七温泉江ノ島鎌倉廻』（以下、『金草鞋』）に着目し、執筆された時期を近世観光成熟期と位置づけ、「歴史的観光資源」「景観的観光資源」「観光経路」「滞在拠点」の4視点より観光形態を捉える[5]。

（1）歴史的観光資源

表8に『金草鞋』における歴史的観光資源を示す。

表8より、歴史的観光資源は全107件であり、このうち「浄光明寺」「琵琶橋」「本覚寺」の3件には経路の関係から2度訪れている。歴史的観光資源のうち寺社、旧跡は全て光圀による発掘、近世観光発達期のものを継承していることを捉えた。一方、「片瀬村」などの地名や「今小路」などの道路の名称については、近世観光発達期以前よりも詳細に記される傾向がみられた。これは、近世観光発達期を経て鎌倉観光が大衆化されたことで、主に徒歩で移動する旅人にとって必要とされるものが一九によって加えられた結果であると考えられる。

以上より、歴史的観光資源では、近世観光発達期の歴史的観光資源に加え、古都に関わる地名や道路名が詳細に記

表８　近世観光成熟期における歴史的観光資源
（白抜きは表題となっている地点）

1	江の嶋道	29	浄光明寺(1)	57	天台山	85	東光山英勝寺
2	片瀬村	30	雪の下	58	大御堂	86	源氏山
3	日蓮上人の寺	31	段蔓	59	釈迦堂が谷	87	浄光明寺(2)
4	江ノ嶋入口	32	琵琶橋(1)	60	文覚の屋敷跡	88	景清土の牢
5	荏之嶋弁才天	33	尊氏の屋敷跡	61	屏風山	89	姫が谷、荒居の閻魔
6	腰越の猟師町	34	本覚寺(1)	62	葛西が谷	90	海蔵寺
7	七里の浜	35	妙隆寺	63	比企が谷妙本寺	91	長寿寺
8	行合川（七里の浜の中ほど）	36	親王屋敷跡	64	田代観音	92	浄智寺
9	浜辺より鎌倉道いるところ	37	鶴岡八幡宮	65	松葉谷安国寺	93	明月院
10	横手原	38	大倉	66	長勝寺	94	六国見
11	日蓮上人の袈裟掛松	39	北条の屋敷跡	67	不陀洛寺の観音	95	東慶寺
12	虚空蔵堂	40	頼経将軍御代ゝの館の古跡	68	三浦道寸の城郭	96	甘露の井
13	星の井	41	頼朝公屋敷跡方の橋	69	天照山の社（光明寺）	97	瑞鹿山円覚寺
14	村立場	42	朝比奈の切通	70	六角の井	98	管領の屋敷跡
15	初瀬の観音	43	侍従川	71	小坪道	99	杉が谷弁財天の宮
16	権五郎景政の社	44	照手姫身代の観音	72	若江の島	100	山の内
17	天縄の明神の森	45	六浦	73	若宮	101	伽羅田山
18	宿屋村	46	金沢の三島明神の社・琵琶島弁財天	74	由井浜	102	十二院
19	日朗法師の土の牢	47	金沢	75	稲村が崎	103	狭踞峯
20	高徳院・大仏堂	48	金沢山称明寺	76	閻魔川	104	丸山稲荷
21	佐々目谷	49	能見堂	77	身代地蔵	105	新宮の社
22	今小路	50	基氏の屋敷跡	78	辻の薬師	106	一本のふるき杉
23	天狗堂	51	杉本の観音大蔵山	79	逆川の橋	107	巨福山興国建長寺
24	巽の荒神	52	滑川	80	大町佐竹天王の宮	108	最明寺の旧跡
25	勝が橋	53	浄妙寺	81	大巧寺	109	亀の井
26	佐助稲荷の宮	54	大塔の宮の土の牢	82	本覚寺(2)	110	離山
27	岩屋堂	55	永福寺の跡	83	中鳥居		
28	松源寺	56	瑞泉寺	84	琵琶橋(2)		

されるようになったことが捉えられた。

（2）景観的観光資源

表9に『金草鞋』における景観的観光資源を、図1に歴史的・景観的観光資源の位置関係と観光経路を、図2に代表的な歴史的観光資源の標高と視線の状態を示す。

表9より、景観的観光資源は全て歴史的観光資源に由来しており、「5荏之嶋弁才天」や「20高徳院・大仏堂」「46金沢の三島明神の社・琵琶島弁財天」など、17件が該当した。

図1より、景観的観光資源の分布をみると、「7七里の浜」において「つたひ、むかふに安房上総の山やまを見わたし（略）」と記されているように、歴史的観光資源を巡りながら得られる景観を「古都観光」における景観的観光資源として再認識させたことが窺える。

視線の方向ごとに景観に関する記述についてみると、海岸から海岸を眺めた地点は「4江ノ嶋入口」「5荏之嶋弁才天」「7七里の浜」「72若江の島」「73若宮」「74由井浜」

表９　近世観光成熟期における景観的観光資源
（白抜きは表題となっている地点）

視線の方向		通過地点名	景観に関する記述（抜粋）	視点の状態
海岸→海岸	4	江ノ嶋入口	わたしをうちこし、鳥居前にいたる。両側に茶屋軒をならべ、にぎハへり。嶋の入口七八丁の間、潮のひたるときハ徒ゆく。潮みちたるときハ船わたしなり。	シークエンス（水平）
	5	荏之嶋弁才天	上の宮、下の宮、本宮、御旅所、いづれも結構華麗なり。別当岩本院、上の坊、下の坊あり。また、窟の弁天、洞穴のうちにたたせ玉ふ。東国扶桑の景致なり。名物貝細工いろいろ。鮑の粕漬けあり。春ハ江戸の休客参詣おほく、いたってにぎハしく群集なすハ、まったく御神の利生いちじるきゆへなり。（狂歌に江ノ島の景観を「ごくさいしき」と詠む）	シークエンス（水平）
	7	七里の浜	つたひ、むかふに安房上総の山やまを見わたし、景色よし。されども、砂道にて難儀なり。此間、牛にのりてよし。（狂歌に牛の歩みが退屈であると詠む）	シークエンス（水平）
	72	若江の島	波打際に、いろいろの形したる岩ども、いくとなくならびたちて景色よし。（狂歌に景色をみると寿命が延びる心地がすると詠む）	シーン（水平）
	73	若宮	昔、鶴が岡八幡宮、此ところにありしを、頼朝公、今のところにうつし玉ふ。いたって絶景のところなり。	シーン（水平）
	74	由井浜	このあたりすべて由井の浜といふ。（狂歌に「そりたてのあをさかゆきと見ゆるかな　なミたいらけきなミゆいのはま」と詠む）	シーン（水平）
	75	稲村が崎	昔、新田義貞、相模入道をほどぼしけるとき、稲村が崎の海をわたりたりといふ。七里の浜とこの由井の浜の間なり。つねに漁師、この所にて、ミな漁師のミ軒をならべて生業をなす浜なり。	シーン（俯瞰）
海岸→内陸	20	高徳院・大仏堂	ミこしか埼、大仏の濡仏にて数丈の御丈、座像なれども見あぐるばかりなり。六銭にて大仏の胎内をおがましむ。	シーン（仰瞰）
内陸→海岸	46	金沢の三島明神の社・琵琶島弁財天	東屋といふみはらしよき茶屋にいりてあそぶもの、遊山、蛤とりのなぐさミあり。こゝの庭の生簀に、いろいろの魚鰭ふりあそぶさま、海の魚のいきたるハ都会の人の目にはめづらしく見へたり。	シーン（水平）
	47	金沢	六浦庄のうちにして、瀬戸橋より東をいふ。この地、風流のところにして、八景のながめはいふばかりなり。	―
	49	能見堂	称明寺の西北にありて、地蔵院といふ。巨勢金岡筆すて松があり。この地より金沢八景ハ一目に見ゆるなり。（狂歌に「ふうけいハのうけんどうにふですてし　まつしまにさへおとらざりけり」と詠む）	シーン（俯瞰）
	56	瑞泉寺（一覧亭）	（錦屏山の）山上、座禅屈の上にあり。（狂歌に「みとれつつ　人はうごかぬざぜんくつにほんいちらんていのけしきに」と詠む）	シーン（俯瞰）
内陸→内陸	30	雪の下	八幡宮の前の町を雪の下といふ。茶屋、旅籠屋おほし。鎌倉一見の人ハ、こゝにて案内をとりてよし。（狂歌に稲刈り、豊年の雪の下町を詠む）	―
	110	離山	鎌倉をいでて離れ山という立場あり。これより戸塚へ一里。（狂歌に「旅笠のちらちらしろく木のまより　見ゆるハ春のはなれ山ミち」と詠む）	シークエンス（俯瞰）
内陸→四方	94	六国見	この（明月院の）上の山をいふ。これより見わたせバ、安房、上総、武蔵、下総、相模、伊豆の六国一目に見ゆるといへり。	シーン（俯瞰）
内陸→不明	103	狭踞峯	荘厳院のうしろの山をいふ。山亭あり、このところより見渡し風景いたってよし。	シーン（俯瞰）
	104	丸山稲荷	これも景到なり。	シーン（俯瞰）

「75稲村が崎」の7件であった。

これらにおける観賞形態をみると、「72若江の島」に「いろいろの形したる岩ども、いくとなくならびたちて景色よし。」とあるように、低い視点より波打ち際の自然要素を海岸に居ながら愛でるものや、「7七里の浜」の「安房上総の山やまを見わたし、景色よし。」のように、三浦半島の向こうに見える遠景を愛でるものといった、低い視点より開放的な海岸景観を望むものとして特徴づけられる。

視点の状態に着目すると、「4江ノ嶋入口」「5荏之嶋弁才天」「7七里の浜」の3件では、水平シークエンス景観（水平方向の移動景観）を捉えた記述がみられた。これには、江ノ嶋入口―七里ヶ浜間が海岸沿いに一続きであるため、連続した開放空間を望む事が出来ることが起因していると考えられる。

一方、七里ヶ浜より東側に位置する「72若江の島」「73若宮」「74由井浜」では、「75稲村が崎」が壁となって富士山や江の島への眺望が塞がれ、さらに七里ヶ浜よりも海岸線が短く湾奥に立地するために逗子方面の眺望も得にくくなる。このことより、若江の島―由井浜間は、動的な景観を眺める七里ヶ浜とは対照的に、湾入地形より創出される穏やかな囲繞空間によって生み出される、静的な水平シーン景観に価値を見出していたと考えられる。

続いて、内陸から海岸を眺めた通過地点は、「46金沢の三島明神の社・琵琶島弁財天」「47金沢」「49能見堂」「56瑞泉寺」（一覧亭）の4件であった。これらのうち「56瑞泉寺」を除く3件は金沢地区にあるが、図1より、移動経路との関係をみると、「42朝比奈の切通」の後、3地点を経て「46金沢の三島明神の社・琵琶島弁財天」に到達している。この「46金沢の三島明神の社・琵琶島弁財天」は、金沢湾の最奥にある小さな人工島であり、「みはらしよき茶屋」の記述より、湾内を行き交う船や島、橋などを眺め

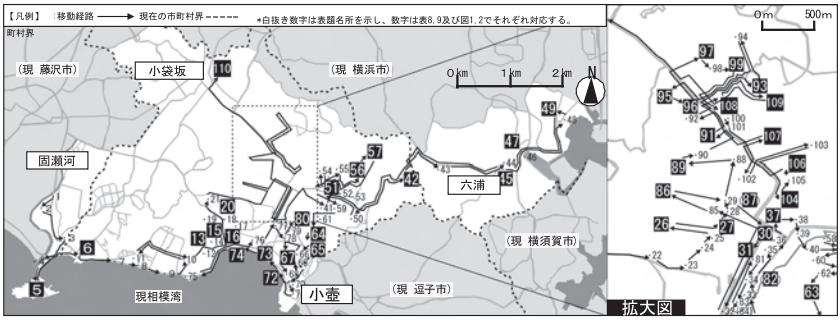

図１　近世観光成熟期における移動経路（白抜きは表題となっている地点）

図２　代表的な歴史的・景観的観光資源の標高と視線の状態
（白抜きは表題となっている地点）

る絶好の場所であったと類推される。その後に巡る「47金沢」については、正確な位置は断定できないものの「八景のながめはいふばかりなり。」と八景を俯瞰で捉えていることより、水平レベルよりは高い立地であったとみられる。

図2より、金沢方面で最も標高が高いのは、標高約90mの「42朝比奈の切通」であり、ここから徐々に標高が下がるに従って、迫りくる金沢八景を望むことができるが、一九はこの道中では一切景観に関する記述を書かずに、標高0mの「46金沢の三島明神の社・琵琶島弁財天」で初めて景観について言及し、その後、金沢を去るまでの「47金沢」「49能見堂」において、「この地より金沢八景ハ一目に見ゆるなり。」、狂歌に「まつしまにさへおとらざりけり」と、経路を進めるに従ってより高い位置からの俯瞰景として捉えていることがわかる。このことより、一九は金沢八景から遠ざかるにつれて、その景観の素晴らしさをシーン景観で表現することによって、徐々にフェードアウトしていく金沢八景を印象付けるよう演出したと推察できる。

同様の表現は、「72若江の島」「73若宮」「74由井浜」と海岸沿いを経た後、内陸から四方を眺めた「94六国見」（標高147m）などにおいても窺える。また、内陸から内陸を眺めた「110離山」の狂歌においても、鎌倉を去り際に眺める街並みを、俯瞰のシークエンス景観で捉えており、一九が旅の転換点を印象付けるために俯瞰景を用いた演出を施していたと推察される。

また、海岸から内陸を眺めた「20高徳院・大仏堂」については、七里ヶ浜に存在した視点場であるミこしか埼(6)より座像を見上げたと仰瞰のシーン景観として表現されており、この後進路を進める内陸方面への地形の急峻さが窺える。

以上のことより、一九は、平野部が狭く急峻な山地とわずかな海岸平地で構成される鎌倉の地形を活かし、俯瞰、仰瞰のシーン景観を用いて、通過地点より捉えた景観を表現することで旅の転換点を印象付けるよう演出していたことが窺えた。

一方、海岸沿いに一続きである、江ノ嶋入口―七里ヶ浜間では、連続した開放空間を望む事が出来、かつ眺望の変化を楽しめることより、水平シークエンス景観による演出がなされていた。同区間におけるこの演出手法は、他の紀行文ではみられず、富士山と江ノ島を振り返りながら、前方に見える安房上総の山々との距離の対比を、一九独自の視点から捉えたものであるといえる。また、景観の記述がみられた17件中11件において海岸への眺望が捉えられていたことより、『金草鞋』において海岸景観が鎌倉を象徴する景観として位置付けられていることを見出した。

視線の動きをまとめると、視点場については、俯瞰の視点場として能見堂、鎌倉山、離山、瑞泉寺などが抽出され、水平の視点場としては江の島、若江の島、琵琶島弁財天が抽出された。一方、視対象については、俯瞰の視対象として金沢八景と鎌倉、水平の視対象として金沢八景、江の島、七里ヶ浜、仰瞰の視対象として大仏が抽出された。

以上の傾向より、近世観光成熟期における景観的観光資源は全て歴史的観光資源に依っており、近世観光発達期に比べ視点場・視対象ともに視線の向きが多様になることが捉えられた。

（3）滞在拠点

ここでは、近世観光発達期同様、宿屋および茶屋の記述より、近世観光成熟期の滞在拠点を捉える。

宿屋の記述は「雪ノ下」の1地点のみであり、近世発達期同様、当時の雪ノ下が観光の中心として賑わっていたことがわかる。

一方で、茶屋の記述は「稲村ケ崎近辺」「虚空蔵堂近辺」「雪ノ下」「網引き地蔵前」の4件がみられた。「稲村ケ崎近辺」において、「はまべよりかまくらみちいるところにちややあり。こゝにてかまくらのゑづをいだし、こうしやくしてこれをあきなふ。」とあり、近世観光発達期における『鎌倉日記』（扇雀亭陶枝）の「ばゞが茶屋」でみられた鎌倉海岸沿いの茶屋がそのまま継承されていることが確認された。記載より、休憩地点も兼ねた絶好の視点場とし

て扱われただけに留まらず、絵図の販売や講釈など観光産業の拠点として機能していたことが窺える。

また、「46金沢の三島明神の社・琵琶島弁財天」において「東屋といふみはらしよき茶屋にいりてあそぶもの、遊山、蛤とりのなぐさミあり。こゝの庭の生簀に、いろいろの魚鰭ふりあそぶさま、海の魚のいきたるハ都会の人の目にはめづらしく見へたり。」より、歴史的観光資源や景観的観光資源に依存するだけでなく、独自に遊山的要素を取り入れ、旅行者を楽しませていたことが捉えられた。

以上より、滞在拠点は宿屋・茶屋ともに歴史的景観資源、観光的景観資源に依る分布をとっており、これらは発達期より継承された宿泊や休憩という機能に遊山的な観光要素を取り入れ、旅行客を楽しませていたことが捉えられた。

（4）観光経路

歴史的観光資源、景観的観光資源、滞在拠点より捉えられた観光経路について以下に述べる。

図1および図2より移動経路と各観光資源の高低差についてみると、一九は「1江の嶋道」より鎌倉入りし、「4江ノ嶋入口」「5荏之嶋弁才天」「6腰越の猟師町」「7七里の浜」「8行合川」「9浜辺より鎌倉道いるところ」と海沿いの低地を通り、高台にある「15初瀬の観音」（現・長谷寺）「20高徳院・大仏堂」の周辺を巡っている。

さらに、鎌倉時代の旧跡が多い「30雪の下」周辺を巡った後、内陸方向に移動し、「42朝比奈の切通」「45六浦」「46金沢の三島明神の社・琵琶島弁才天」「47金沢」「48金沢山称明寺」「49能見堂」と金沢方面に向かっている。

再び「42朝比奈の切通」に戻り、「53浄妙寺」の後「72若江の島」「74由井浜」など海岸を経て、鎌倉街道沿いの「95東慶寺」「107巨福山興国建長寺」に立ち寄った後、「小袋坂」（現・巨福呂坂）より鎌倉を出ていた。

以上の経路は地形の変化に富んでおり、海岸沿いに一続きである七里ヶ浜、由井浜を西から東、東から西と二度に分けて巡っていることから、先述した地形の変化を経路に意図的に織り交ぜることで、道中の景観を効果的にみせる

演出をしたとみられる。

以上のように、近世観光成熟期の観光経路では、歴史的観光資源と景観的観光資源が同等に扱われており、一九が観光資源を総括した「古都観光」のモデルルートを確立したことが明らかとなった。

（5）近世観光成熟期のまとめ

近世観光成熟期では、十返舎一九の『金草鞋』に着目し、当時の観光形態を捉えた。

歴史的観光資源では、近世観光発達期の歴史的観光資源に加え、古都の地名・道路名が詳細になる傾向を捉えた。

景観的観光資源は歴史的観光資源に依っており、近世観光発達期に比べ視点場・視対象が多様になることが捉えられた。

滞在拠点では、宿屋・茶屋ともに歴史的景観資源、観光的景観資源に依る分布であり、これらは発達期より継承された宿泊や休憩という機能に遊山的な観光要素を取り入れ、旅行客を楽しませていたことが捉えられた。

観光経路では、歴史的観光資源と景観的観光資源が同等に扱われており、一九が観光資源を総括した「古都観光」のモデルルートを確立したことが明らかとなった。

以上より、近世観光成熟期は観光資源および経路上で捉えた景観を楽しみながら巡る「古都観光」のスタイルが確立された時期であり、この観光形態が十返舎一九の手で魅力的に演出されたことによって、大衆に伝わったといえる。

4．近代観光期

明治維新後、わが国には多くの西洋文化が輸入されるようになり、鎌倉にも一八七〇年頃には人力車が普及、一八八九（明治二十二）年には国鉄横須賀線鎌倉駅（現・ＪＲ鎌倉駅）が開業、一九一〇（明治四十三）年には江之島電氣鐵道小町駅（現・江ノ島電鉄鎌倉駅）が開業した。近代交通の導入は、近世まで継承されてきた鎌倉の古都観光に大きく影響し、観光形態の変容を余儀なくされたと考えられる。

本章では、『鎌倉市史―近世近代紀行地誌編』に掲載された3文献（『鎌倉紀行』『江の島紀行』『韻文散文　雪月花』（以下、『雪月花』））に着目し、「歴史的観光資源」「景観的観光資源」「滞在拠点」「観光経路」の4視点より観光形態を捉える(7)。

（1）歴史的観光資源

表10に近代観光期における歴史的観光資源の一覧を、図3にその分布を示す。

表10より歴史的観光資源は、『鎌倉紀行』で24件、『鎌倉日記』で11件、『雪月花』で25件、重複を除いた全39件が抽出され、このうち、3文献全てに共通してみられたのは「鶴岡八幡宮」「江の島」「七里ヶ浜」の3件であった。

近世観光の発掘以降、近世観光発達期、近世観光成熟期に至る近世鎌倉観光においては、多くの歴史的観光資源を巡る傾向がみられ、中には100件を越えるものもあったが、近代観光期は全体的に件数が少ないことが窺える。

この理由の1つとして、『鎌倉紀行』において「相模の名所を細やかに探らば、二日の日力を費やさでは叶はずとも、最も著名なる処のミを問ひたまはんには、第一ニ権五郎景政遺跡、第二ニ長谷寺の観音、第三ニ大仏、第四ニ鶴岡八幡宮、第五ニ大塔宮、第六ニ建長寺、第七ニ円覚寺、など見たまはゞ、それにて足りてんといへり。」とあり、

表10　近代観光期における歴史的観光資源

鎌倉紀行	鎌倉日記（奈良原時子）	雪月花（大和田建樹）
1876年（2泊3日）	1889年（14泊15日）	1894年（29泊30日）
1　片瀬村	1　鶴が岡八幡の神社	1　由井が浜
2　江島	2　大塔宮	2　極楽寺切通
3　江ノ島神社	3　初瀬の観音	3　七里が浜
4　竜ノ口	4　大仏	4　腰越
5　日蓮上人の旧蹟	5　女谷の観音	5　片瀬
6　腰越村万福寺	初瀬の観音	6　江の島
7　七里が浜	6　星月夜の井	7　山の内
8　行合川	7　日蓮の袈裟掛け松	8　雪の下
9　稲村が崎	8　行合橋	9　鶴岡の八幡宮
10　袖が浦	9　七里が浜	10　円応寺（新居の閻魔様）
11　大館又次郎源宗武主従十一人墓ト題したるもの	10　江の島	11　建長寺
12　権五郎景政	11　岩屋の弁在天	12　月影谷
13　長谷寺		13　寿福寺
14　大仏		14　海蔵寺
15　初瀬村大威山清浄泉寺		15　十六の井戸
16　鶴岡八幡祠前		16　浄光明寺
17　雪ノ下村		17　山の内の切通
18　頼朝の邸趾		建長寺
19　大塔宮護良親王の社		18　小坪
20　鶴岡八幡宮		由井が浜
21　建長寺		19　材木座
22　山之内村		20　閻魔橋
23　五輪塔		21　安国寺
24　円覚寺		22　妙本寺
		1896年（19泊20日）
		1　鶴が岡
		2　小坪
		3　光明寺

図３　近代観光期における歴史的観光資源の分布

旅行者が地元の案内人の薦めに従って赴いていた様子が捉えられた。

図3より、歴史的観光資源の分布をみると、歴史的観光資源は鎌倉中心部、鎌倉海岸沿岸、江の島周辺にみられ、近世にみられた金沢方面のものは全くみられなかった。

この要因として、藤沢、鎌倉には十九世紀末にはすでに国鉄（東海道線、横須賀線）が開通し、さらに二十世紀初頭には鎌倉海岸沿いに江之島電氣鐵道が開通したことで、鎌倉～江の島には、東京方面からの旅客を多く運んでいたことが挙げられる。一方、金沢には接続する路線がなく、一九三〇（昭和五）年に大師電気鉄道（現・京浜急行電鉄）が開通するまで、東京から金沢方面に直接向かう鉄道は存在しなかった。

以上のことより、近代観光期には歴史的観光資源を巡る件数が大幅に減少したことに加え、金沢地区が鎌倉に帰属する観光圏から外れたことが捉えられた。

（2）景観的観光資源

表11に近代観光期における景観的観光資源を示す。

景観的観光資源は『鎌倉紀行』で6地点7件、『鎌倉日記』で1地点2件、『雪月花』で9地点9件みられ、全体で16地点18件が抽出された。このうち歴史的観光資源は「江の島」「大仏」「鶴岡八幡宮」など6地点であった。

視線の動きに着目すると、視点場の傾向としては、「江の島」など歴史的観光資源が6地点8件、『鎌倉紀行』に

表11　近代観光期における景観的観光資源

		視点場（数字は歴史的観光資源）		景観の記述	視線
鎌倉紀行		2	江島	山中山茶花の大樹多し。皆花をひらき、いとうつくし。	シークエンス
		3	江ノ島神社	山上より四方を眺望めば、渺茫たる蒼海は遠く天に接はり、豆相の諸山環列り、洵おもしろしなどいふもおろかなり。	シーン（眺望）
				（洞窟から外に出て）渺茫たる大海を見渡したるときの心地よさ、またたとふるにものなし。	シーン（眺望）
		—	岩本楼	三層の楼閣高く空に聳え、風致最も佳絶。（略）遠くより望めば粉壁皓窓碧海の間に出没し、画家の散水に拏霺たり。	シーン（眺望）
		—	詳細不明（浜海に沿ひつゝゆく。）	（浜海に沿ひつゝゆく。）渺茫たる荒海はるかに霞天漫りて、遠近の山色黛眉の如く、波間にあらわれたる景色いとおもしろし。	シークエンス
		14	大仏	由井浜を望めば、景色すこぶるよし。	シーン（眺望）
		16	鶴岡八幡祠前	都にもおとらぬ光景なるは王仁の民に霑ひたるを卜すべし。	不明
鎌倉日記		9	七里が浜	（行合橋ー七里が浜を行く）江の島、稲村が崎など、打ち渡さる気色いとめでたし。	シークエンス
				右の方は小つぼとか云ふ。浦回の見渡しいと広くて、海原の果てに、遠く伊豆の大島も見ゆ。その島くちに、三原山といふあり、峯より噴き出づる烟の雲の棚引きたる、目路いと遙かなれば、打ち向ふ心も広くのびやかになる心地す。	シークエンス
雪月花	1894	—	前田喜八邸	右には稲村が崎まぢかく立ち、左には三浦三崎の山々まで呼べば応ふるの絶景あるをや。況んや前は漁村を隔てゝ烟波万里の海天を望み、後は晩金霞を破るの幽趣ある山寺を背おひたるをや。斜陽波を射て吟情まづ孤帆の辺に在り。	シーン（眺望）
		—	極楽寺切通-七里が浜間	見よあれに浮かびたるが江の島よといえば、一しほの勇気を皷して	シークエンス
		—	岩屋におりんとする処の茶屋	見おろす方は岩屋の道にて、もぐりどもの身を逆さまにして飛びこむも、唯目の前なり。遠くは烏帽子岩を中にして、右の方には大磯より箱根のあたり、左には三崎の鼻より大島まで、霞みながらに指ざゝるゝこそ心ゆく限なれ。	シーン（眺望）
		—	不明	長き日を此島に送りて帰らんとすれば、（略）七里が浜も見えずなりぬ。（略）	不明
		—	建長寺内の半僧大権現うしろの一の茶店	眺望打開けたり。是に一休みして茶をもてくる老婆に問へば、あれなるは戸塚・程谷、右の端の平たきところが神奈川なりなど、指さし示す。	シーン（眺望）
		16	浄光明寺	（山頂にて）遠くは由井が浜より三浦のかたまで、たゞ一望の下に来りて、帰帆の影と夕波の声と、今も歌人の幽魂を慰むるに似たり。	シーン（眺望）
		—	材木座の橋のたもとの茶店	腰うちかけて見わたす景色まづすぐれたり。	シーン（眺望）
	1896	—	（宿りとするところ）材木座光明寺の前	ゐながらにして鎌倉の海を一目望むべく、向には霊山崎につゞきて江の島の浮べるあり、少し右にはなれて雲まに富士の聳ゆるあり、それよ長谷の村里、由井の松原、たゞ手にとる如く波をへだてゝ打ちむかはるゝもおもしろきに、南の方には伊豆の大島さへ、晴れたる日には鯨のしほふく心地して向ひたてるよ。左の方に隣してつきいでし浦里は飯島とぞよぶなる。	シーン（眺望）
		—	渚（詳細は不明）	（夕刻に）染められて立てる富士、忽ち紫に、忽ち黒く、忽ち薄く、遂に姿をかくして止みぬ。	シーン（眺望）

おける岩本楼をはじめ宿屋・茶屋など滞在拠点が8件、『雪月花』における「極楽寺切通ー七里が浜間」のように視点場が明確でないものが4件みられた。

視対象の傾向としては、「稲村ケ崎」などの歴史的観光資源を宿屋や道すがら眺める記述がみられた。例えば、『雪月花』の「前田喜八邸」において「右には稲村が崎まぢかく立ち、左には三浦三崎の山々まで呼べば応ふるの絶景あるをや（略）」とあり、宿屋の窓より近景に稲村ケ崎、遠景に三浦三崎の山々などを望んでいる様子が捉えられる。

以上の傾向より、近代観光期における景観的観光資源では、歴史的観光資源が主として視点場ではなく視対象として認識されるようになったことが捉えられた。

（3）滞在拠点

近代観光期の滞在拠点のうち宿屋として『鎌倉紀行』の「堺屋平十郎邸」、『鎌倉日記』の「海浜院」、『雪月花』の「前田喜八邸」、「材木座光明寺の前」の4件が抽出された。

食事・休憩の拠点については、『鎌倉紀行』における「岩本楼」など、3件が抽出された。これらのうち近世より継承されているのは、「岩本楼」「恵比寿屋」「角屋」の3件であり、いずれも著名な宿屋である。これらは、食事・休憩の拠点といった、近世観光発達期の多様な観光形態が継承されていることが窺えた。

一方、『鎌倉日記』の「海浜院」は、わが国初のサナトリウムとして由比ヶ浜に建てられた所謂鎌倉における近代化の象徴といえる建築物であり、新たな文化を取り入れている旅行者の存在も捉えられた。

滞在様式および滞在期間に着目すると、『鎌倉日記』では14泊15日、『雪月花』は一八九四（明治二十七）年に29泊30日、一八九六（明治二十九）年に19泊20日、と宿泊拠点を1ヶ所としながら長期滞在しており、宿泊拠点を移動しながら各地を巡るものからリゾート型の観光形態へと変容したことが窺える。

以上より、近代観光期における滞在拠点は、近世までにみられた観光資源を「巡る」観光形態から、宿屋や別荘などに「滞在する」リゾート型の観光形態へと変容したことによって1ヶ所に長期滞在する傾向が捉えられた。

（4）観光経路

各文献における鎌倉入、鎌倉出の地点より観光経路に着目すると、横須賀線開通以前に記された『鎌倉紀行』における鎌倉入は、国鉄東海道線藤沢駅より人力車で片瀬まで移動したことが記されている。鎌倉出は、北鎌倉周辺で人力車に乗った後、東海道線横浜駅より鉄道を利用したことが把握できた。横須賀線開通後に執筆された『鎌倉日記』『雪月花』では、鎌倉駅を鎌倉の玄関として利用していることが捉えられた。

全文献における鎌倉内の移動は人力車または徒歩であ

り、特徴的な経路は得られなかった。

以上のように、近代観光期における観光経路は鎌倉への出入については鉄道が利用されており、鎌倉内の移動は人力車と徒歩で行っていたことが捉えられた。

（5）近代観光期のまとめ

本章では、近世に成熟した古都観光が近代化の影響を受けた結果変容した観光形態を、近代に執筆された紀行文・滞在日記3文献より捉えた。

歴史的観光資源では、地元の案内人の言う通りに歴史的観光資源に赴いたことによって件数に大幅な減少がみられたことに加え、金沢地区が鎌倉に帰属する観光圏から外れたことを捉えた。

景観的観光資源では、歴史的観光資源が主として視点場ではなく視対象として認識されるようになったことを捉えた。

滞在拠点では、近世までにみられた観光資源を「巡る」観光形態から、宿屋や別荘などに「滞在する」リゾート型の観光形態へと変容した傾向を捉えた。

観光経路では、鎌倉への出入には鉄道が利用され、鎌倉内の移動には人力車と徒歩であったことを捉えた。

以上のことより、近代観光期は近代化の影響を受け、景観的観光資源、滞在拠点が歴史的観光資源より乖離し、かつ金沢が鎌倉に帰属する観光領域より外れたことより、近世にみられた巡る「古都観光」が衰退した時期であるといえる。

おわりに

鎌倉における「古都観光」とは、鎌倉が古都であった時代の事物やいわれを旅行者に伝える「歴史的観光資源」を視点場または視対象として捉える「景観的観光資源」が認識され、これらを楽しみながら巡るための「滞在拠点」が適切に配された上で、これら全てを網羅する「観光経路」としてモデルルートが確立されたものであることを捉えた。

この「古都観光」は「近世観光の発掘」「近世観光発達期」の観光サーベイを経て、「近世観光成熟期」に大衆化されたものであるが、近代以降は鉄道の敷設や滞在のリゾート化などにより、近世でみられた網羅的な「古都観光」は完全に分断・縮小された。

本研究で得られた「古都観光」の知見をもとに、今後の鎌倉における歴史まちあるき観光を考える際には、古都に関する事物やいわれなどから現存する歴史的観光資源同士の空間的な繋がりを把握した上で、「巡らせる」ためのモデルコースを設定するといった、仕掛けづくりを行うことが求められる。

注

(1) 原淳一郎（二〇〇一）：大山参詣をめぐる社寺参詣者の動向―藤沢・江ノ島・鎌倉との関連で―：史学七〇（二）、一四九―一七〇

(2) 松尾剛次（一九九三）：中世都市鎌倉の風景：吉川弘文館

(3) 押田佳子（二〇一二）：徳川光圀『鎌倉日記』にみる近世鎌倉の観光および景観資源の発掘に関する研究：ランドスケープ研究七五（五）、三七三―三七六

(4) 押田佳子・横内憲久・岡田智秀・瀬畑尚紘（二〇一一）：紀行文より捉えた近世鎌倉における観光経路および滞在拠点の成立過程に関する研究：ランドスケープ研究七四（五）、四三一―四三六

(5) 押田佳子・横内憲久・岡田智秀（二〇一〇）：十返舎一九「金草鞋」を通じてみた近世鎌倉観光における通過地点の景観構成とその観賞形態に関する研究：ランドスケープ研究七三（五）、五一九―五二二

(6) 十返舎一九著・鶴岡節雄校注（一九八二）：十返舎一九の箱根江の島鎌倉道中記：千秋社　の表記に合わせて「ミこしか崎」とした。

(7) 川田佳子（二〇一二）：景観工学より捉えた鎌倉における伝統的「古都観光」の成立と継承に関する研究：日本大学学位論文